大西民子を顕彰　薫風に歌人の面影

盛岡市の上の橋たもと　母校の生徒らと碑前祭

第11回「きららか歌碑」碑前祭が11日、盛岡市の上の橋たもとの歌碑前で行われた。盛岡市出身の歌人・大西民子（1924～94）を顕彰するもりおか民子の会（阿部正穂会長）主催。約100人が短歌「きららかについばむ鳥の去りしあと長くかかりて水はしづまる」が刻まれた歌碑前に集い、盛岡で青春を過ごした民子の歌と人生に思いをはせた。

暖かな春の陽光のもと歌声を響かせた盛岡二高音楽部

大西民子は盛岡市八幡町生まれ。県立盛岡高等女学校（現盛岡二高）、奈良女子高等師範学校を卒業後、釜石高等女学校で教諭を務めた。石川啄木に憧れて作歌を始め「まぼろしの椅子」など歌集9冊を刊行。迢空賞、詩歌文学館賞、紫綬褒章などを受けた。

歌碑は2009年に建立され、民子直筆の「きららかに」の歌と、チェロ奏者で作曲家の平井丈一朗氏が同歌に曲を付けた際の譜面が刻まれている。

碑前祭には、もりおか民子の会、民子らが結成した「波濤（はとう）短歌会」の関係者、県歌人クラブなど県内の文学関係者ら、民子の母校に当たる盛岡二高の生徒たちが出席。

阿部会長は、10日に盛岡市先人記念館館長を訪ね、顕彰先人に民子を加えてほしいと頼んだことを報告。「大西さんは亡くなった埼玉県でいろいろ顕彰されているが、古里盛岡ではまだまだ認知度が足りない。顕彰活動をこれからも行い、皆さんの力を借りながら目標に向かって頑張りたい」と話した。

盛岡二高文学研究部は、部員代表3人が民子作品から「私の好きな一首」を紹介した。

部長の齊藤花歩さん（3年）は「オリオンの位置もやっとやく移ろふと春の疾風（はやて）の夜々（よよ）帰りゆく」を選び、「民子さんはすでにある、目になじんだものの変化を敏感に感じ取って詠んでいるのがすてきだと思う。オリオンの位置、疾風といった言葉の選び方もきれい」と読み取った印象を語った。

続いて、吉田渚沙さん（3年）は「しあわせは何とも定めがたき身に賜（たま）びし指環（ゆびわ）の黄玉（オパール）やさし」、国枝可愛さん（2年）は「てのひらをくぼめて持てば青空の見えぬ傷より花こぼれ来る」を紹介した。

同校音楽部は、民子の短歌に平井氏が作曲した「きららかに」や民子も歌った旧校歌などを歌い、澄んだハーモニーを響かせた。

副部長の細谷茶菜さん（3年）は「響くホールと違って歌いにくい点もあったが、来てくれた人に少しでも大西民子さんの歌の良さが伝われば」と思って歌った」と振り返る。宇夫方千颯さん（同）は「曲を通して、二高を卒業された大西民子さんを知ることができた。この機会に、皆さんに大西さんの曲を届けられて良かった」と話していた。

盛岡タイムス 2019年5月13日(月)付
この写真と記事は盛岡タイムス社の
許諾を得て転載しています。